

自分の生き方を見せながら ひきこもる若者たちと向き合う

たなか としひで
田中 俊英さん

NPO法人青少年自立支援施設
淡路プラツツ 代表



就労支援と精神的支援が同時に求められる

ひきこもっている子どもの支援をボランティアで始めたのは、20年ほど前からです。当時は登校拒否といわれていて、中高生世代が対象でした。やがて問題の根深さに気づき、2000年に淡路プラツツのスタッフになりました。それでもまだ20歳でひきこもっていると聞くと驚いたのですが、現在では30歳前後が会員の中核になっています。

若者の問題に特徴的なのは、労働問題であるとともに心の問題でもあるということです。2000年代半ば頃にニートや『若者が社会的弱者になる』(宮本みち子著)という本が話題になり、現在では非正規雇用の拡大がはっきりと認識されていますが、ひきこもりと若者の就労困難とは関連しています。同時に社会参加できることで精神的な危機に立たされる若者も出てきます。就労支援と精神的支援が同時に求められるのです。

時間をかけて人への信頼感を取り戻す

プラツツは3階建ての建物で、3階は個人的カウンセリング、2階は集団生活訓練の場、1階は就労に向けてトレーニングをする場となっています。まずは3階でこれまでのことや悩みなどを聴き、信頼関係を築きます。自分の居場所だと感じられるようになったら、2階でほかのメンバーと一緒に料理や作業をしたり、外へ出かけたりします。人にもりますが、3階から2階へ移行するのに2,3年かかるのもよくあることです。2階に慣れ、気持ちの準備が整えば、1階で就労をめざします。スムーズに進むわけではなく、3階と2階、2階と1階を行ったり来たりすることも多々あります。

個人的カウンセリングといっても、いわゆる心理力

ウンセリングではありません。雑談や好きなアニメの話で終わる日も多いです。はたから見ればダラダラしゃべっているだけに見えるかもしれません、いじめなどで人間関係に大きな不安や不信感を抱いている人が多いので、まずはいかにリラックスしてもらえるかが大事なのです。

精神療法と呼ばれるものはいろいろありますが、突き詰めれば人への信頼を取り戻すためのスキルではないでしょうか。ぼくたちは一人ひとりの生活に寄り添いながら、より生きやすくなるためにどうすればいいのかと一緒に動きながら考えていく、という方法を大事にしています。病院のカウンセラーや医師は個人である前に専門家ですが、NPOの職員は専門家であると同時に自分自身の生き方も見せるという部分があり、これもNPOならではの武器だと思います。福祉医療の専門職とはまた違うやりがいを感じています。

社会の認識が進み、支援がしやすくなつた

この3、4年で、若者の生きづらさは個人の問題ではなく、社会の問題であるという認識が社会全体で共有されるようになりました。私たちのようなNPOが行政と連携できたりして、支援活動がとてもしやすくなりました。理解を求めるだけで大変だった時代から、やっと問題自体に取り組める時代になりました。若者の生き方も今まで以上に多様化していくでしょう。暗い部分が強調されがちですが、ぼくは希望を感じています。

NPO法人青少年自立支援施設 淡路プラツツ
TEL/FAX:06-6324-7633
<http://www4.ocn.ne.jp/~awjplatz/>

支援を進めるお二人の活動から、支援する方自身が自らにも問い合わせながら、支援を受ける方の気持ちにぴったりとつながっておられると感じました。「人を支援する」ことは、自らを問い合わせ、その人権問題と自分とのかかわりを見つけることなのかもしれません。

